

念仏者は、無碍の一道なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も業報を感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道なりと云々

第4組 瑞雲寺住職

小泉 元瑞

text by Genzui Koizumi

## 第7章「信心の行者」

### －苦悩を除かん－

人間が浄土を願ったり、あるいは自身のすくいを求めたりするもとは、生活の現実で抱えているさまざまな苦悩や不安ということがあります。機を明らかにする経典といわれる『観経』で、章提希が先ず求めたものは「無憂悩処」です。三悪趣という悪に満ちた世界、つまり人を傷つけ苦しめる言葉は聞きたくないし、自分の嫌いな人の顔は見たくない、つまり何処かは分からないけれども、とにかく憂いや悩みのない世界に生まれたいということです。換言すれば、苦悩の人生にあって、私たちは本当の意味での楽、つまり生きる喜びとは何かを知りたいということがあります。ところが私たちは、生活を妨げる原因が自身の外側にあって、それさえ排除すればその願いがかない、もっと自由に生き生きと輝いた生活があると思いついています。そのことが天神地祇に怯えたり、あるいは魔界外道がはびこるもとなります。

### －自身を知らず－

言葉としては使っていますが、自身が「罪惡生死の凡夫」であることを、私たちは本当には知らないのです。日常の意識にはないことなのです。私たちは、善も悪も徹底することはできません。自らの善惡の計らいによって、悪事をなせばその報いを恐れ、善いことをしたつもりで神の加護を期待し、結果に一喜一憂するような生活を迷っています。つまり、生死の迷いから一步も抜け出る

ことができないのです。ですから罪業と聞いても無自覚なのであります。つまり自らが為したことに自ら縛られ、結果を業の報いであるとして罪ではなく罰におののき、因そのものの罪悪を自覚することがないのが、私たち凡夫の現実です。さらにその原因が、積善をしなかった自分にあるという、後悔と愚痴の生活であるとすれば、今日を苦しみと不安のうちに生きて、一生を空しく送らざるを得ないのです。

### －信心の行者－

『歎異抄』の背景には、二種深信の教えがあります。障りの因を、自身の外にしか考えられない罪悪生死の凡夫に、私こそが罪業の存在であると信知せしめるのが、本願力回向の念仏の法であります。ですから如来によって、流転の事実を知らされなければ、罪悪と聞かされても人間心で解釈し、時に自己反省をするだけなのです。人間心では暗さを免れられないのです。しかし、本願の用きによって、今まで対象的に怖れていたすべての障りが力を失ない、往生の障りではなくなるのです。同時に三大阿僧祇劫という、凡夫において成就不可能な万行諸善を積むことへの憧憬からも、解放されるのです。なぜなら諸善といっても、その価値基準は結局のところ人間心である自らにあるわけですから、積善の名の下、その実、個人的な安心を求めるとと変わりがないからなのです。「雑毒の善・虚仮の行」という指摘は、善行を修する人間の無意識の狡猾さが問題なのです。念仏者とは「信心の行者」であって、何かを対象的に信じて、そこに安住するような、いわゆる「信者」のことではありません。何か特別な修行をする能力のある人のことでもありません。如来の大悲回向の念仏の法を、どこまでも凡夫の身のままで行ずる人のことです。一人を生きられた念仏者は、人生の不安に惑わされず、求道の促しと受け止めて聞法されました。その道こそ、万人に公開されたものであり、それこそ私たちも、この一道によって去かんという勇気を与えられる道であるのです。